

ネルヴァルの「黄金のロバ」について

SUR L'ÂNE D'OR DE GERARD DE NERVAL

博士後期課程 仏文学専攻57入学

恩 蔵 昇

NOBORU ONZO

その頃私たちは、ふつう革命のあとや、偉大な治世の衰微のあとにやってくる一種異様な時代に生きていた。

(……) それは (……) —— なにかしらペレグリヌスやアプレイウスの頃を思わせる時代だったのである。

「シルヴィ」¹⁾

ネルヴァル研究者、ジャン・リシェ Jean Richer は、1955年に、「ジェラルド・ド・ネルヴァル作、黄金のロバ」*L'âne d'or par GÉRARD DE NERVAL* という文章を発表した²⁾。それによると、ネルヴァルは、1842年に、エドモン・テクシエ Edmond Texier、あるいはアルセヌ・ウーセイ Arsène Houssaye と共同で、「黄金のロバ、ペレグリヌスによる諷刺集」*L'âne d'or, recueil satirique par Pérégrinus* という本を書いたと言う。そして、ジャン・リシェは、その本のうちの第一章から第五章までと、結語の部分を、ネルヴァルの手になるものと推定し、リシェが故アルベール・ベガン Albert Béguin と共に編集していたプレイヤー版「ネルヴァル作品集」第三版(1960)に、その該当部分を収録した³⁾。それ以後「黄金のロバ」(の一部分)はネルヴァルの作品とみなされるようになったが、この小論においては、アプレイウス Apulée の作品⁴⁾と同じ題名を持つこの作品の発見の経緯、及びネルヴァルのものとするその根拠、並びにその内容について、若干の考察をしてみようと思う。

I

まず、上に述べたリシェの文章に従って、話を進めよう。

「メルキュール・ド・フランス」誌 *Mercure de France* の1955年5月1日号に掲載されたその文章によれば、リシェはジュール・クラルシー Jules Claretie の書いた文章に注意を引かれた。クラルシーはペトリュス・ボレル Pétrus Borel の伝記⁵⁾を書いたが、その伝記の中で、1845年頃に出版されたボレルの「黄金のロバ」*L'âne d'or* という選集の主な共同執筆者の中に、ネルヴァルの名を挙げていると言うのだ。のみならずその文章の引用までしてあった。そこで、リシェは国立図書館を初め、あちこちの図書館を調べたが、それらしい本は見つからなかった。そうした時に、ある人——ペイローブ嬢 M^{lle} Peyraube——から、国立図書館にエドモン・テクシエ作とされた「黄金のロバ」

Ane d'or という本がある、という情報を得た。

その本は124頁の小さな12折判で、ラヴィーニュ書店刊、イポリット・ティヤール社印刷となっていたが、中を読んでみると、それはクラルシーの引用した本ではなかった。しかし、内容的には、明らかにネルヴァルのテキストを含んでいるように思われたので、リシェは、1840年から1850年までの「フランス著述目録」*Bibliographie de la France* を綿密に調査した。その結果、目録にはリシェが発見した本しか載っていないことが分かった。このペレグリヌス作「黄金のロバ」は、諷刺集として分類され、番号は860番、1842年2月19日刊としてある。従って、クラルシーは、この本と別の本とを混同していたのだろう、とリシェは考えた⁶³。

つまり、リシェはクラルシーの指摘から出発して、クラルシーの引用している本とは別の「黄金のロバ」に出会ったということになるのだが、では「混同」された本は何だったのだろうか。ジャン・スヌリエ Jean Senelier 「書誌の試み」*Essai de Bibliographie* (Nizet, 1959) の「黄金のロバ」の項目には、ボレルやユゴーたちによる同名異本がアルスナル図書館にある、と指摘してある。それは1844年、18折本で8頁の、「絵画雑誌」*Revue Pittoresque* から抜粋した選集となっている。実物を見ていないので、どのようなものかは分からないが、8頁というとパンフレットのようなものだろうか。クラルシーの言うボレルの「黄金のロバ」は、この本かも知れない。

さて、話をもとに戻そう。「あばかれた文学の欺瞞」*Les supercheries littéraires dévoilées* を書いたケラル Quérard によれば、ペレグリヌスというペン・ネームは三人の作家が使っており、この本（つまりペレグリヌスの「黄金のロバ」）は、エドモン・テクシエのものであると言う。つまり、国立図書館の分類と同じである。リシェは、このペン・ネームが、ネルヴァルとウーセイの使っていたロード・ピルグリム Lord Pilgrim というペン・ネームに似ていると言うが、どんなものだろう。この本の主人公はペレグリヌスという名前であって、その著者名と同じである。この主人公は、古代ギリシア犬儒派の哲学者であるペレグリヌス・プロテウス Pérégrinus Protée の靈魂であって、オリュンピアの競技会で焼身自殺した際に、昇天するはずの靈魂が別の少年の肉体の中に転生してしまい、以来千数百年の間、様々な肉体の中に転生を繰り返して来た、という設定である。そして十九世紀の貴族の死体に転生したことから、この物語が始まるのだが、要するに、単に主人公の名を作者の名としただけのこととも考えられるのである。ロード・ピルグリムとの類似を持ち出すよりも、むしろ単純にそう考えた方がよいのではないか。

次に、リシェはネルヴァルとテクシエの関係について述べている。この本の刊行された1842年2月という日付は、ネルヴァルにとっては、どういう時期だったのか。このすぐ後の1842年6月5日に、彼の女神とも言うべきジェニー・コロン Jenny Colon（オーレリア）が死んでいるが、それは別として、その前年の1841年2月21日、あるいは23日に、最初の狂気の発作がジェラルを襲う。そしてマダム・ド・サン＝マルセルの精神病院に入り、5月1日にはジュール・ジャンン Jules Janin の記事——いわばネルヴァルの精神の「墓碑銘」——が、「デバ」紙 *Journal des Débats* に掲載される。5月21日には、再び発作が起き、エミール・ブランシュ博士のモンマルトルの病院に入院し、11

月21日まで、そこにとどまる。1842年のネルヴァルの動静は、はっきりしないが、4月5日にアルセーヌ・ウーセイの結婚式に列席、4月23日には、300フランの救援金を受けとっている⁷⁾。「つまり、彼の健康はまだ静養が必要であり、不規則にしか仕事が出来なかったと言うことだ」⁸⁾とリシェは言っている。そしてこの時期に、ネルヴァルのために、出版社や内務省（救援金の関係だろう）とかけあっていたのが、友人テクシエであった。従って、テクシエが一人で、出版元に「黄金のロバ」の原稿を持っていったことも考えられ、そこでこの著名なジャーナリストが、その作品の作者と誤解されたのかも知れない、とリシェは推定する。

しかし、そうは言うものの、この作品の全体がネルヴァルのものとは考えられない、とリシェは言う。全部で124頁のこの本のうち、74頁以降は政治問題を扱っており、その諷刺も直接かつ個人的で、ほとんど中傷的な表現が用いられている。それは、ネルヴァルにおいては他に見られないものであるから、この部分は、テクシエか、アルセーヌ・ウーセイのものとするのがふさわしいだろう、とリシェは考えた。

とすると、「黄金のロバ」はネルヴァル、テクシエあるいはウーセイの共作ということになり、その共同執筆者のうちの一人の名が、作者として示されたことになるだろう。著者名の問題に関するリシェの結論は、おおよそ、このようなものだ。

次にリシェは、題名および内容の検討に移る。

「黄金のロバ」という題名は、アプレイウスの作品の題名と同じである。ネルヴァルはこの作家、およびその作品に何度となく言及している。リシェは、その例として「幻視者」*Les Illuminés* と、「イシス」*Isis* とを挙げている。前者は、その「ジャック・カゾット」*Jacques Cazotte* の章で言及しており⁹⁾、「火の娘たち」*Les Filles du Feu* に収められている後者は、アプレイウスの本を主要な典拠としている。従って、この題名は、ネルヴァルにとってなじみの深いものであると言える。

さて、リシェは全体の124頁のうち、5頁から75頁までと、120頁から123頁までをネルヴァルのものと推定している。それはⅠ章から、Ⅴ章までと、結語に相当する部分である。各章の題名は、Ⅰ.「肉体なき靈魂」《*Une âme sans corps.*》, Ⅱ.「人道主義的会議」《*Séance humanitaire.*》, Ⅲ.「ラテン語は何の役に立つか」《*A quoi sert le latin.*》, Ⅳ.「酋長」《*Le cacique.*》, Ⅴ.「オペラ座の舞踏会」《*Le bal de l'opéra.*》である。このうち、Ⅰ章とⅢ章については、同様の内容を持つ別のテキストが知られていた。Ⅰ章の「肉体なき靈魂」は、「サン＝ジェルマン伯爵」*Le Comte de Saint-Germain* の初稿と見なしうる。Ⅲ章の「ラテン語は何の役に立つか」は、1841年、「ル・プリズム」誌 *Le Prisme* にアロイジウス Aloysius という名でジェラルールが発表した「同窓生の宴」*Les banquets d'anciens écoliers* という文章を増補・再編成したものであり、他の三つの章は、今まで知られていなかったものだ、とリシェは言う。

さて、この物語の内容に対するリシェの簡単な分析に入る前に、このへんで、粗筋だけでもざっと述べておいた方が都合がよいと思うので、以下に示すことにしよう。

Ⅰ章の「肉体なき靈魂」は、「サン＝ジェルマン伯爵」とよく似ている。ド・モラングル侯爵が、友人ダルマニーの遺骸の前に坐って、死体防腐処理人の来るのを待っている。すると目の前の死体が息をふきかえし、驚いている侯爵に向かって、自分はペレグリヌス＝プロテウスだと告げる。つまり、オリンピア広場で焼身自殺した際に、その光景を見ていた少年の一人が窒息して死に、昇天するはずのペレグリヌスの靈魂が、その少年の肉体の中に転生してしまった。それ以来、16世紀もの間にわたって、ペレグリヌスの靈魂は、地球上の様々な人種、様々な階層の男女の肉体に転生し続けてきた。しかもペレグリヌスという名前になる前は、三度変身したかのルクウス（アプレイウス「黄金のロバ」の主人公の名前）だったと言う。この生きてもおらず、亡霊でもなく、歴史上の存在でもなければ、伝説上のものでもない者は、最後の審判の日に大きな役割を果たさなければならないと言い、ド・モラングル侯爵を案内人として、この時代のフランスの社会を観察するために、まずデュ・バック街で行なわれている社会主義者の集会へと出かけてゆく。

先にⅡ章の題名 *Séance humanitaire* を仮に「人道主義的会議」と訳したが、humanitarisme と言えば、ユートピア的な、いわゆる危険思想を指すので、当時一般の社会主義者の集会を指すと思われる。さて、この集会では演説者が次々に演壇に登って、各自の主張を述べる様が描かれているが、最初の男の演説はさながらフーリエリズムのパロディである。曰く、国家の顛覆、ファランステールの設立、チューリップの栽培のみに情熱を燃やすチューリップ主義者、オムレツを作品として完成させるオムレツ名人。さらにアナロジーの法則、上昇期4万年、下降期4万年、北極冠、レモネードの海、また乗り物としての反ライオン、反アザラシ、また32の主要天体間の交信等々について述べ、一番目の演説者は演壇を降りる。二番目の演説者はマパ Mapah であって、エヴァダイスム évadaïsme（イヴ＝アダム主義）、つまり簡単に言えば二対立の融合の思想を述べ、ナポレオンを礼賛する。この間、熱狂した聴衆の一人に対して、巡査が騒ぎを聞きつけてやって来るかも知れない、と静粛にするよう注意する。三番目の演説者は、脳器官を正しく成長させることによって、人間は善人となり、世界は幸福になるだろうと説き、そこで自分の発明した器官矯正帽を売りつけようとする。ペレグリヌスは、これらの演説を聞いていたが、自分が紀元前2世紀のアレクサンドリアにいた頃にも、この時代と同じような改革者たちがいた。しかし時とともにその理論は忘れられてしまった。今日の改革者たちも同じ運命をたどるだろう、と言いつつ外へ出る。

Ⅲ章の「ラテン語は何の役に立つか」は、バルバンシュ学院という学校の同窓生たちの宴会の様子を描いている。主人公二人（つまり、ド・モラングル侯爵と、別の靈魂の宿った肉体のもとの所有者ダルマニー）はこの学校の卒業生である。宴会は、同じ卒業生の一人が経営するレストランで行なわれる。昔の小学生たちは、今や市議会議員、靴商人、ヴォードヴィル作者、神父等々になっているが、ペレグリヌスは、ラテン語の勉強が政界や文学の分野ばかりでなく、ヴォードヴィルやメリヤス業界、演劇、なめし皮商、油取引等々の分野での権威者を生み出したことにただただ驚く。次にレストランの主人が、かつて学界に入りながら未だ芽が出ず、今ここのレストランのコック見習いをし、生活をしのいでいるフランパンという男について述べ、逆境にある彼を助けるために、友情によ

る献金をしようではないかと言って、小銭を載せる皿を一同にまわす。やがて当の貧乏学者が姿を現わし、わきあいあいのうちに宴会を終わる。翌日の新聞には、この名士たちの同窓会の記事が載り、レストランの住所と、いつでも宴会等の申し込みに応ずる旨告げてあった。そこで侯爵はペレグリヌスにこういう。「多分君はたずねるだろうね。レストランの親父に、ラテン語が何の役に立つのかってね。」

Ⅳ章の「酋長」では、ペレグリヌスが、アイルランド人の中尉の肉体の中に転生した時の話が語られる。この中尉はロンドンで服毒自殺をし、その結果、ペレグリヌスの靈魂がその肉体に入ったものであったが、その境遇はみじめなものだった。そこで、ペレグリヌスはアメリカ・インディアン^①の酋長の恰好をして、鳴物入りでパリにやって来た。そして、アメリカ独立戦争に参加した「新世界の英雄」であるラファイエットに会い、自分がかつてお前と友情のパイプを交わした酋長ピック＝アユバ＝クロコディル^②の息子だ、と言って信じこませる。そして、自分の部族を独立させ、自由政体を持った独立国を作りたい、についてはその国の憲法草案をラファイエットに作ってほしいと持ちかける。彼の助力によって、銀行家に紹介され、その資金を得て、独立国建設のための公債を発行し、またローマに赴いて、教皇からそのインディアンの国家に司教区を作ってもらい、その任命権や、また軍隊等の高位職の権利を売り払ってまんまと莫大な金を手に入れた酋長は、一人でポリネシアに高飛びし、その地で豪華な生活を送る。要するに、ヨーロッパ中をペテンにかけた男の話が語られるのである。

Ⅴ章の「オペラ座の舞踏会」では、主人公二人はオペラ座に出かける。そこで行なわれる舞踏は、もはや昔の優雅な舞踏会などではなく、熱狂した群衆の「地獄のギャロップ」である。つまり、ギャロップ（二拍子のテンポの速い踊り）を踊りながら旋回し、まるで巨大な蛇のような螺旋を形作るのである。それは舞踏会と言うよりは、乱痴気騒ぎなのだった。そこを後にすると、今度は演劇の話になる。女優も今日では昔とちがって、結婚をするようになり、平凡な生活を送って、美德を競うようになってしまった。女優が単なる人間になってしまったことで、芸術は多くのものを失なった。さらに、芸術を支えていた大貴族も、銀行家たちにとって代わられてしまい、かつて、現実の人生の中で舞台の人生を続けさせた、夢のような時代はどこかへ行ってしまった、とド・モラングル伯爵は嘆く。すると今度は、ペレグリヌスが、過去に見てきた芝居の話を始める。偉大なる世紀のオペラの熱狂や王室での祝祭の荘麗さ、衣裳や舞台の豪華さと言ったら、今日の比ではない。奇跡の宮廷（中世にパリや大都市で乞食や泥棒が集まっていた地域）を舞台とする「乞食のバレー」の、乞食たちの衣裳の見事さときたら、ルイ十四世までもがその衣裳を着て、踊りたがったほどだった、というペレグリヌスの話の後、今度はジョルジュ・サンドに対する、やや中傷めいた話に移る。サンドはある日、ある伯爵から、サンドが編集長をしていた雑誌に、伯爵の作った詩を載せてほしいと頼まれた。労働者びいきだったサンドは、伯爵でありながら、しかもすぐれた詩人などというものは考えられないと言って、読みもせず断った。次の日、伯爵はみすばらしい紙張り職人の恰好をして、同じことを頼みに行き、サンドの前で自作の詩を朗読した。するとサンドは大いに賞讃し、詩篇は掲載された。数

日後、掲載に対する伯爵からの礼状が届き、それ以来サンドは紙張り職人を信用しなくなり、ひそかに古靴の修理職人を信用するようになった、という話である。

「結語」においては、ノアの洪水以前の、失われた種族を再発見しようとする、考古学者のド・ブランヴィル氏を耶揄している。この学者のところに、何かの骨——貧乏人のまずしい鍋の中から出てきたかも知れないような骨——を持って行くと、この骨の断片から、たちまち失なわれてしまった動物の一体系の理論が出来上がってしまう、といった話であり、文章の最後には、「で、あなたはこれを世界と呼ぶのですか」というファウスト博士の言葉が引用され、作品全体が終わる。

さて、内容に対するリシェの分析であるが、第一章「肉体なき靈魂」と「サン＝ジェルマン伯爵」との比較は、1842年のネルヴァルと1853年のネルヴァルとの隔たりを測り得るものだとし、それは物語「魔法の手」(1832)とオペラ・コミック「栄光の手」(1850)との関係と同様、時代が下るにつれて、オカルト的な傾向が強くなっていることが分かる、と言う。そして、この「転生」のテーマは、ネルヴァルの作品の他の場所でも見られると言って、「ニコラの告白」*Les Confidences de Nicolas* から文章を引用し、さらにバルザックにも同様のテーマがあると言う。

第二章のフーリエリズムの諷刺については、ネルヴァルはおそらくフーリエの著作、とくに「四運動および一般運命の理論」*Théorie des quatre mouvements et des destinées générales* (1808) と、「国内農業結社論」*Traité de l'association domestique-agricole* (1822) などにごっと目を通し、そこから一節を引用・剽窃したに過ぎないだろうと言う。リシェはネルヴァルとフーリエの間に深い結びつきは認めていないようだ。ただ1854年10月24日付のアントニー・デジャン宛の手紙に、「奥義に通じた、ヴェスタル」とあるのを指摘して、これがフーリエのヴェスタルを想起させるとしている¹⁰⁾。

また、フランスのスウェーデンボリ主義者であるマバ・ガンノー及び弟子のカイヨーについては、ナポレオン崇拝との関連について触れ、さらに、ネルヴァルが1845年6月29日付の「ラ・プレス」誌 *La Presse* に発表した「知られざる神々」*Dieux inconnus* という文の中で、マバとその弟子を耶揄していることを指摘している。

リシェの分析はここまでであって、この後には、「黄金のロバ」のⅠ章とⅡ章が紹介されている。

さて、リシェのこの文を読んだ限りでは、また現在のプレイヤード版に収録されたテキストを読んだ感じでは、この「黄金のロバ」が非常にネルヴァル的な作品であり、随所に後年の作品との関連が見られるように思われる。特に、第一章「肉体なき靈魂」は、「サン＝ジェルマン伯爵」の古い形——後者には前者にない「ポーロニヤの碑文」がつけ加えられている——と見なしうるだろう。また、第三章「ラテン語は何の役に立つか」との関連で述べられている、アロイジウス作「同窓生の宴」——リシェによれば、この文章の作者として、「プリズム」誌の目次にネルヴァルの名が載っている——は、プレイヤード版の註にその全文が収録されているが、これも、ほぼ同じものと言っていいようだ。違う点は、固有名詞が異なっている点と、この宴会が催された経緯——すなわち売り上げの落ちたレストランの主人が、客を呼ぶ手段として、名士たちの集まる同窓会を開くといった内容——、そ

してラテン語云々の部分が、ほとんどない点だけであって、その大半が文章そのものも同じである。どちらかと言えば、「プリスム」誌発表形の方が、短いながらもまとまっていて、それを後から、「時代の異邦人」たるペレグリヌスの眼で見直した、という感じがする。

II

「黄金のロバ」のⅠ―Ⅴ章、及び結語をネルヴァルのものとしたリシェに対して、ジェラルド・シェフェール *Gérald Schaeffer* は、1968年 *R. H. L. F.* に、「ネルヴァルとテクシエ、あるいはペレグリヌスからオリブリウスへ」*Nerval et Texier, ou de Pérégrinus à Olibrius*¹¹⁾ と題する文章を発表した。今度は、この文章に従って再検討をしてみよう。

まずシェフェールは、「粹な放浪生活」の作家たち、すなわちジェラルドやゴートィエらの文学仲間、友情にもとづいて、そのテーマや考え方、イメージを交換しあっていた。従って、無署名や他の名前で発表されたテキストの作者を、そのテーマやイメージにもとづいて、ア・プリオリに決めることは出来ない、と指摘している。そして、実例として、ネルヴァルの署名入りの、ハイネについての文が、1858年に刊行されたハイネの本へのゴートィエの序文の中に、基本的に再び見出され、さらにリシェが、そのゴートィエの原稿を発見した、という事実を挙げている。従ってここでも二人の友人（ネルヴァルとテクシエ）がともに仕事をしたのであるならば、あまりに寛大にネルヴァルのものとされた部分については、プレイヤード版から、取り除くべきだ、とシェフェールは言う。そしてテクシエの「パリ情景」*Tableau de Paris*¹²⁾ から、「ネルヴァルの」な文章を引用している。そして特に、「黄金のロバ」との関連において、二つの作品を並べて引用しているので、ここでもそれを引用しよう。まずテクシエからの引用。

巨大な蛇となったギャロップ踊りは、劇場の天井から吊り上げられた、太陽のようなジャンデリヤの、幾千という光をうけて輝く、とぐろをほどいていった。

*Le galop, serpent gigantesque, déroule ses anneaux qui étincellent aux mille rayons des lustres suspendus, comme autant de soleils, au firmament de la salle.*¹³⁾

次に「黄金のロバ」からの引用を挙げる。

[……] 踊り手たちは、ギャロップを踊りながら旋回し、巨大な渦巻を形作った。それはさながら、その輝くとぐろを太陽の下にさらけ出した、巨大な蛇であった。

[----] les danseurs tournoyaient en galopant et formaient une spirale immense; on aurait dit un gigantesque serpent étalant au soleil ses anneaux étincelants.¹⁴⁾

さらにシェフェールは引用を続ける。

観客席を離れて、休憩室へ行ってみたまえ。そこには短い服を着てピエロに扮した女や、肩も露わな仮装の女たち以上のものがある。諸君は、黒いドミノ仮装服や黒い服の大海の、まっただなかにいるのだ。——休憩室は、観客席とはまったく逆なのである。公訴人のように重々しく、葬儀屋のように陰気な紳士たちが、陰謀をもとめて、何時間もさまよい歩いているのだ。「パリ情景」

Quittez la salle et transportez-vous vers le foyer. Là, plus de pierrettes court-vêtues, plus de débardeuses décolletées; vous êtes au beau milieu d'un océan de dominos noirs et d'habit noirs; — le foyer est l'antithèse de la salle. Des messieurs graves comme des notaires et sombres comme des croque-morts se promènent pendant plusieurs heures, à la recherche de l'intrigue.

*Tableau de Paris*¹⁵⁾

彼らは休憩室にやって来た。場面は一変した。もはや舞踏会場の荒々しい、みだらな激しさはなかった。ここには仮装以上のものがある。つまり黒い服と押し黙った顔があり、さきほどとは逆に、際限のない倦怠が、すべての顔をいろどっていた。「さてさて」と侯爵が言った。「あちらには、混乱し、汚れ、酔っぱらった一群の仮面の人々がおり、こちらには、それぞれの炉辺を後にして、代訴人さながらに重々しく歩いてゆく人々がいるわけだ。」

「黄金のロバ」

Ils gagnèrent le foyer. La scène avait changé: ce n'était plus cette rage grossière et dévergondée de la salle de bal. Ici plus de déguisements: des habits noirs et des figures silencieuses; par contre, un ennui sans bornes peint sur tous les visages. «Voyez, dit le marquis, là-bas une foule de masques barbouillés, souillés, avinés; ici, des gens qui sortent du coin de leur feu et s'avancent aussi graves que des avoués.»

*L'Ane d'or*¹⁶⁾

シェフェールは、ペレグリヌスとド・モラングル侯爵という二人の主人公については、ネルヴァルのものであると認め、さらに第一章「肉体なき靈魂」が、「サン＝ジェルマン伯爵」の最初の形であるというリシェの説を紹介しており、そのことについては否定していない。しかし、第二章以下はテクシエの手になるものであって、ささいなヴァリエーションはあるものの、「パリ情景」の最初の形と見なすことが出来ると言い、そのことは以上に示した比較によって明らかだ、と主張する。そして、誠実なテクシエは、1852年の「パリ情景」において、1842年の旧作（「黄金のロバ」）から、自分のものだけを持って来たのであって、そこでは、ペレグリヌスとド・モラングル侯爵の代わりに、オリブリウスという主人公がパリで友人と出会って、当時流行していた政治的＝神秘的な教説を見聞することになっている、と説明する。シェフェールは第二章「人道主義的会議」についても、比較してい

る。それも以下に引用しよう。

テクシエ：

彼らが広間の中に入ると、男女の入り混った数多くの人々の姿が見えた。これらの人間じみた雌ライオンたちのある者は、疲れ蒼ざめたその顔色の上に、徹夜の宴会のあとをとどめていた。

Lorsqu'ils entrèrent dans la salle, ils virent un public nombreux composé d'hommes et de femmes. Quelques-unes de ces lionnes humanitaires portaient sur les traits de leurs visage pâlis et fatigués les traces du banquet de la veille.¹⁷⁾

「ネルヴァル」：

彼らが広間の中へ入ると、男女の入り混った数多くの人々の姿が見えた。これらの人間じみた雌ライオンたちのある者は、蒼ざめたその顔色の上に、徹夜の舞踏会の疲労のあとをとどめていた。

(初めの部分から sur les traits まで同じ。それ以下は) de leur visage pâli les traces de fatigue du bal de la veille.¹⁸⁾

「舞踏会」bal が「宴会」banquet になっているが、テクシエの方が状況によりよく合っている。なぜなら、二人の人間は、社会主義の集会にやって来たからだ、とシェフェールは言う。

さらにテクシエは、その著作「パリ情景」の中で、ネルヴァルとその作品「東方紀行」*Voyage en Orient* について語っており、従って、テクシエがその友人の文章を剽窃することなど考えられない、としている。

シェフェールの結論は、要するに、第一章は別にして、「黄金のロバ」の大部分はテクシエのものである、ということだ。特に第二章「人道主義的会議」の全部¹⁹⁾と、第五章「オペラ座の舞踏会」の描写的な部分、つまりオペラ座での物語については、はっきりテクシエのものとしている。第五章の最後にある、ジョルジュ・サンドに対する「中傷めいた」逸話も、ネルヴァルのものではないと主張する。その例証として、リシェの発表した1853年11月22日付ジョルジュ・サンド宛の、ネルヴァルの手紙²⁰⁾を引用している。「それにしても、久しく私はあなたを愛してまいりました。ただ同じように偉大なもうひとりの女性ほどにはありませんが。……ここに、私を思い出していただくために、十年前の同じ日に、あなたに宛てて書いたソネがあります。敵だか味方だか、だれかの手先が、おそらくこれを横領したのでしょうか。』²¹⁾このように書いているジェラルールにとって、サンドに対する中傷や耶揄は、不愉快なものであろう、とシェフェールは言う。

第三章「ラテン語は何の役に立つか」と第四章「酋長」の——シェフェールによれば「凡庸な」——部分については、「パリ情景」には見られない、と言い、おそらくリシェの言うように、ウーサーか、

あるいはテクシエの他の著作からとったものかも知れない、としている。

ここで第三章について、シェフェールが言及していないのはやや奇妙な気がする。なぜなら、すでにリシェの文章で、その古い形の「同窓生の宴」が紹介されており、その内容も、全く同じ部分がありあるからだ。シェフェールは、「同窓生の宴」を見ていないのだろうか、それとも故意に触れていないのか、やや不思議に思われる。

そして「結語」の部分については、テーマはネルヴァルの——大洪水以前の世界——であり、ファウスト博士の引用で終わっているが、その皮肉な調子は、ネルヴァル的でないとしている。シェフェールは、「黄金のロバ」の大部分をエドモン・テクシエに委ねるべきで、しかもそうしたところで、たいした後悔の念も湧かない、と言うのである。

以上が、シェフェールの文章の要旨であるが、ここで、リシェとシェフェールの論点を整理してみよう。

1. 「黄金のロバ」は、テクシエだけの手になるものではなく、テクシエとネルヴァル（あるいはウーセー）の共作である、とする点では一致している。
2. リシェは、そのうちのⅠ—Ⅴ章と、結語をネルヴァルのものとする。特に、Ⅰ章とⅢ章については、ヴァリエーションがある、とする。
3. シェフェールは、そのうちのⅠ章、および主人公をネルヴァルのものとし、残りの大部分をテクシエ（あるいはウーセー）のものとする。特にⅡ章と、Ⅴ章については、（テクシエの）ヴァリエーションがある、とする。

要するに、「黄金のロバ」のⅡ—Ⅴ章がネルヴァルのものか否かが問題なのである。

次にブレイヤード版の註にリシェが付した、シェフェールに対する簡単な反論をあげておこう。それによれば、シェフェールの疑義提出にもかかわらず、「黄金のロバ」の冒頭は、たしかにネルヴァルのものである。また、テクシエがネルヴァルの文章を剽窃したという事実を認めるためには、次のことを見れば十分である。つまり、テクシエは「ケン玉の思い出」*Mémoires de Bilboquet* (1853年、全三巻)において、1841年以来「ル・プリスム」誌にネルヴァルの名前で——先のリシェの文章によれば、正確にはアロイジウスという名前で（ネルヴァルの名は目録に載っているはずだ）——発表された「同窓生の宴」を剽窃している。さらに、この本にはネルヴァルから借りたものが沢山ある²²⁾、としている。つまり、シェフェールがテクシエの作品の中に見出せなかった第三章にあたる部分を、逆にリシェがテクシエの他の著作の中に見つけたわけだ。

「黄金のロバ」のⅡ—Ⅴ章の文章とよく似た文章が、テクシエの著作にあることは事実だろう。これを一方のシェフェールは、その文がテクシエのものである証拠として挙げ、他方のリシェは、テクシエがネルヴァルの文章を剽窃した証拠として挙げている。これでは、この事実のみから、結論を引き出すのは無理である。筆者としても、安易に結論めいたことを言うことはできず、この議論には困惑するばかりである。

Ⅲ

ただ以下に筆者の感想をつけ加えることにしよう。「黄金のロバ」が、ネルヴァル研究の重要な資料であることに変わりはない。シェフェールが戒めていることから分かるように、一読して、ひじょうにネルヴァル的な作品であると思う。まるで、晩年のネルヴァルの作品を知っている誰かが、ネルヴァルのパロディを書いたような気さえするほどの——勿論1842年という時点では到底不可能だが——「ネルヴァルの」作品である。シェフェールの言うように、「ネルヴァルの」であるからと言って、それがネルヴァルの手になるという証拠にはならないが、「黄金のロバ」の中で、ネルヴァルの他の文章を想起させる部分をいくつか述べてみようと思う。

第一章は言うまでもなく、「サン＝ジェルマン伯爵」を想起させるが、魂の転生については、「赤い予言者たち」*Les Prophètes rouges* (1850) にこういう文章がある。「(……) ピエール・ルルーがキリスト教に対置したいと思っている信仰の根本的基盤は、創造されることなく始源より永劫に存続し完成を期し得る『人類』^{ヌマニチ}なのだ。この結果として、一つの魂は、この地上の世界へ繰り返し出現し続けることによって、自らを完成して行くのである。」²³⁾ この文章は、「黄金のロバ」のテーマとも言うべきものだろう。

次に、フリーエリスムについては、ネルヴァルはさほど頻繁に言及しているわけではないが、同じ「赤い予言者たち」に次のような文がある。「フリーエこそ正真正銘の予言者だった。(……) 尻尾のことや、レモネードに変じた『大洋』のことや、反＝ライオンのことを別にすれば、コンシデランによって説かれたフリーエの教説は、とりわけフランス革命の汎神論哲学の思想の返り咲きである。」²⁴⁾ だが、こうした引用よりも、第二章全般との関連で想起されるのは、「シルヴィ」*Sylvie* (1853) の次のような一節だろう。「その頃 私たちは、ふつう革命のあとや、偉大な治世の衰微のあとにやってくる一種異様な時代に生きていた。(……) それは活気、躊躇と怠惰、輝かしい理想境への夢想、哲学的または宗教的な憧憬、本来の自己の再生へのある種の本能的な予感が交ったとりとめもない熱狂、そうにいったものが一つに混ざり合って、——なにかしらペレグリヌスやアプレイウスの頃を思わせる時代だったのである。」²⁵⁾ 第二章はまさしく、そういう時代の一面を描写したものである。そして主人公のペレグリヌスは、自分の昔の記憶をよみがえらそうとしている。また、マパの演説の途中での、巡査が来るかも知れない云々は、今引用した「シルヴィ」の一節のすぐ後に出てくるフン族やコサック族云々という部分を思わせるだろう。

第三章、第四章もネルヴァル的な感じはするが、それよりも、第五章の演劇についての二人の会話に興味を引かれる。奇跡の宮廷を舞台とする「乞食のパレー」はゴナン親方の「阿呆の王」*Le Prince des Sots* を思わせるが、それは別として、ワットー云々の部分を以下に引用してみたい。

「もっとも不思議な色調の中から選び抜かれたニュアンスに富む、ワットーの地平線、茜色の夕陽、青味をおびた森、淡い薔薇色の水辺、綿子の帆を張り、薔薇の花づな飾りをつけた黄金色の小

舟、そして恋する波が、湖の鏡面の上を戯れながら小舟の後を追ってゆく。そのような時、そこにこそ注目に値する光景があることが分かるだろう。」

«(----) des horizons de Watteau, aux nuances choisies parmi les tons les plus étranges, des soleils couchants violets, des arbres bleus, des eaux d'un rose tendre, des barques dorées aux guirlandes de roses, aux voiles de satin, qu'un flot d'amours poursuivait en se jouant sur le miroir des lacs, alors on comprend que c'était là un spectacle digne d'attention !»²⁶⁾

まるで散文詩のように美しい一節だ。拙ない訳などではなく、原文で読んでいただきたい。夕暮れの青味をおびた森の緑、そして茜色の夕陽が染め出す薔薇色、この色の配合はまさしくネルヴァルのものではなかったろうか。「シルヴィ」を読んだことのある人ならば、ただちにその第四章「シテールへの旅」*IV.-Un Voyage à Cythère* を思い出すだろう。以下にその一部を引用する。

舟で湖を渡るという企画は、たぶん、ヴァトーの『シテールへの旅』を彷彿させようとして発案されたことだったのだろう。(……) 車ではこぼれて来た祭典の巨大な花束がおろされて、大きな舟の上にすえられた。(……) そして、さんざしの 藪や列柱や明るい葉むらが夕陽に赤々と染まっている島の岸辺と舟との間にひろがる静かな湖水の面には、古き時代を今によみがえらせる優雅な祭列の影が映っているのだった²⁷⁾。

シェフェールとしては、この部分をもテクシエのものと言っているわけではない。しかし「黄金のロバ」の冒頭の部分は別として、残りの大部分をテクシエのものとしても措くはないと言う。筆者としては、やはり惜しいと思う。それは、今引用した部分だけ取り上げてみてもそう思われる。

ところでエドモン・テクシエと言えば、例の「オートル・シメール」*Autres Chimères* の詩六編の書かれた、日付不明・宛先人不明の手紙²⁸⁾の、受け取り人とも目されている人である。ジャン・ギョーム Jean Guillaume は、ゴーティエに宛てたものと推定したが、後にテクシエ宛てとする説が出てきた。この手紙には「マダム・サンドに」*A Mad^e Sand* という詩篇が載っている。そこで先ほどシェフェールの引用したサンド宛のネルヴァルの書簡(註21参照)を思い出してみよう。そこには奇妙な言葉があった。「十年前の同じ日に、あなたにあてて書いたソネがあります。敵だか味方だか、だれかの手先が、おそらくこれを横領したのでしょう。」²¹⁾「マダム・サンドに」という詩は生前発表されず、1924年「フィガロ」紙*Le Figaro* に初めて掲載された。誰かが横領した、などというネルヴァルの言葉自体奇妙なもので、単純に信用するわけにはいかない。しかし、シェフェールが「誠実な」と形容するテクシエを、リシェは、ネルヴァルの文章を剽窃した人間だと非難する。悪く考えれば、「マダム・サンドに」という詩篇を「横領した」のはテクシエかも……いや、これだけのことを

もとに、そう言うのは全くの空想である。だいたい、テクシエは、ネルヴァルの精神的な危機の時代に、ネルヴァルの面倒を見てくれた友人である。もしかすると、仮にテクシエがネルヴァルの文章を使ったとしても、それに対するネルヴァルの同意があったとも考えられるだろう。当時大作家でもなかった、この青春時代からの二人の友人が、融通しあったとしても、別に驚くべきこととは言えない。仮にそうだと仮定すると、事態は一層困難になり、問題は袋小路に入ってしまうが、いずれにしてもネルヴァルとテクシエの共作になる「黄金のロバ」が、ネルヴァルの文学活動における重要な資料であることに変わりはないはずである。

「黄金のロバ」がプレイヤード版に収録されて以来、前にも述べたように、一般にはネルヴァルのものと考えられるようになってきている。だが、すでに報じられているように、今度プレイヤード版の編者がリシェからギョームに変わるようになった。ギョーム編「ネルヴァル作品集」は未だ刊行されていないが、その中で「黄金のロバ」がどのような取り扱いを受けるか、大きな興味とともに注目していきたい。

参 考 文 献

- Sylvie*: *Sylvie de Gérard de Nerval*, texte présenté et commenté P.-G. Castex, S. E. D. E. S. 1970.
Œuvres I: Nerval; *Œuvres I*, texte établi, présenté et annoté par Albert Béguin et Jean Richer, Bibliothèque de la Pléiade, N. R. F., Gallimard. 3^e édition; 1960. 5^e édition; 1974.
Œuvres II: Nerval; *Œuvres II*, édition présentée, établie et annotée par Albert Béguin et Jean Richer, Bibliothèque de la Pléiade, N. R. F., Gallimard. 5^e édition, 1978.
「ネルヴァル全集」全三巻、中村真一郎他訳、筑摩書房、1975-1976年。
シャルル・フーリエ「四運動の理論」上巻、巖谷國士訳、現代思潮社、1970年。

〔註〕

- 1) *Sylvie*, p. 28. 入沢康夫訳。
- 2) *Mercure de France*, 1^{er} mai 1955. pp. 42-60.
- 3) *Œuvres I*, 3^e éd. 1960.
- 4) cf. アブレウス作「黄金のろば」。岩波文庫。上巻(1956年)呉茂一訳。下巻(昭和32年)呉茂一・国原吉之助訳。
- 5) J. Claretie: *Pétrus Borel* (1865).
- 6) cf. *Œuvres I*, 5^e éd. 1974. p. 1365.
- 7) cf. *ibid.*, p. XXV, CHRONOLOGIE. なお、救援金云々については、pp. 916-917 参照のこと。1842年4月23日付のアベル・ヴィルマン Abel Vilemain の手紙から、ヴィクトル・ユゴー Victor Hugo の働きかけで、ネルヴィルに300フランの救援金が出たことが分かる。
- 8) *Mercure de France*, p. 43.
- 9) cf. *Œuvres II*, 5^e éd. 1978, pp. 1150-1151.
- 10) *Œuvres I*, 5^e éd, p. 1187, vestal は造語で、vestale のeを取って男性形にしたもの。vestale とは、ローマの火の女神であるウェスタ Vesta に仕えた巫女で、ひじょうに純潔な娘をも指す。ネルヴァルの文学との関連で言えば、「火の女神に仕える者」、「火の息子」の意味になるだろう。一方、フーリエは「四運動の理論」の中で、「純潔な男」の集団を指す意味で、vestal という言葉を使っている。フーリエの数多い造語の一つ。cf. 巖谷訳「四運動の理論」上巻、p. 284.

- 11) *Revue d'histoire littéraire de la France*, Septembre-Octobre 1968, pp. 828-831.
- 12) *Paulin et Le Chevalier*, 2 vol., 1852-1853.
- 13) Texier; *Tableau de Paris*, p. 47., *《Le Carnaval》*.
- 14) *Œuvres I*, 5^eéd., p. 545, *《Le Bal de l'Opéra》*.
- 15) Texier; op. cit., p. 47.
- 16) *Œuvres I*, 5^eéd., p. 546.
- 17) Texier; op. cit., p. 249-250,
- 18) *Œuvres I*, 5^eéd., p. 529-530.
- 19) シェフェールによれば、プレイヤード版ネルヴァル作品集(第三版)の523-526、527-8、529-30ページ(第五版では529-536ページにあたる)は、それぞれテクシエの著作の、246-254、279-80、268-9ページに一致しているという。
- 20) *Œuvres I*, 5^eéd., p. 1106-1108.
- 21) *ibid.*, p. 1107. 井村実名子訳。
- 22) *Œuvres I*, 5^eéd., p. 1365.
- 23) *Œuvres II*, 5^eéd., p. 1243, 入沢康夫訳。
- 24) *ibid.*, p. 1242, 入沢康夫訳。
- 25) *Sylvie*, p. 28. 入沢康夫訳。
- 26) *Œuvres I*, p. 550.
- 27) *Sylvie*, p. 36-37. 入沢康夫訳。なお、この対応関係は、リシェもプレイヤード版の註で指摘している。
- 28) *Œuvres I*, p. 916. 1841年11月のものという説が有力である。